

核のない世界を！ 2009MIC 長崎フォーラム

～核軍縮の行方と被爆国・日本の役割～

2009年8月8日(土)：午後1時30分～6時45分

8月9日(日)：午前9時～正午

8月8日(土)

- 13:30～13:40 開会挨拶 長崎マス共議長挨拶 中野 議長
MIC 議長挨拶 豊 議長
- 13:40～14:30 黙祷
ドキュメンタリー「被爆者の証言の記録に生涯をかけたある市民ジャーナリストの軌跡」
- 14:35～15:35 基調講演『核軍縮はどこに向かうのか』
前田哲男氏(軍事ジャーナリスト)
～伊藤明彦の仕事語りながら、「被爆国・日本にできること」を考える～
- 15:35～16:25 被爆者の証言 廣瀬方人氏(長崎の証言の会・代表委員)
(休憩 10分)
- 16:30～18:00 シンポジウム「核軍縮の行方と被爆国・日本の役割」
パネリスト：前田哲男氏(軍事ジャーナリスト)
田城 明 氏(中国新聞・ヒロシマ平和メディアセンター長)
高橋信雄氏(長崎新聞・論説委員長)
廣瀬方人氏(長崎の証言の会・代表委員)
コーディネーター：吉田文彦氏(朝日新聞・論説委員)
- 18:00～18:20 質疑応答
- 18:20～18:25 アピール案提案・採択
- 18:25～18:30 閉会挨拶 大原 MIC 事務局長
- 18:30～18:35 事務連絡
- 18:45～ 交流会…………フォーラム会場の5階

8月9日(日)

9:00～12:00 長崎新聞前に集合 → 平和散歩～爆心地公園 → 解散

日本マスコミ文化情報労組会議 (MIC)

長崎マスコミ文化共闘会議

基調講演 『核軍縮はどこに向かうのか』

～伊藤明彦の仕事を語りながら、被爆国・日本にできることを考える～

軍事ジャーナリスト 前田哲男

伊藤明彦は2つ年上で、1年先輩でしたので私は「伊藤さん」といい、彼は「前田さん」という、そういう呼び方でした。伊藤さんは私が長崎に1961年に入社した時から、1年先輩の記者として働いていました。最後の1年間は佐世保で勤務し、私はその後、1年して佐世保で記者生活をやめたので2人とも在職年数は10年間。私は71年に退社した。私はその後、上京してフリーのジャーナリストになり、伊藤さんは市民ジャーナリストという立場を選んで仕事をした。つきあいは2人会社を辞めて東京へ出て、おのおのの道を歩き始めてからの方が長い。よく酒も飲みました、議論もしました、けんかもしました。今年3月3日に突然の訃報を聞いて驚いた。伊藤さんは私が1年後に辞めたときに、この仕事を手伝ってくれると半ば期待し、予期していたようでした。私はそれは退社の理由にありませんでしたし、その旨伝えて伊藤さんは了解してくれました。

伊藤さんの仕事は復元、リストアする「復元主義者」、「復元者」。私は同じ期間、長崎放送で主に佐世保の勤務が長かったせいもあって、原子力潜水艦、原子力空母エンタープライズの日本初めての寄港、その現場で目の当たりにし、且つ、その背後で動いていたベトナム戦争、それに日本が深々と関与していく。伊藤さんはそういう時代の流れを見ながら被爆地長崎から、「被爆の原点」に遡って行って、復元する方向にいった。私は被爆地長崎県から「核戦略」の方向に変革していく、トランスフォーメニストの道を歩こうと思いました。辞めた後、最初に選んだテーマが「第五福竜丸の向こう側にどんな光景が広がっていたか」、ビキニの海、そしてビキニの島人の核の時代における運命、彼らが受けた体験を記録した。問題意識において伊藤明彦と私は全く変わっていなかったと思います。手法が伊藤さんは過去に塞源をおろし、復元し続ける。私は長崎の後、何が起こったのか、何が伝えられていないのかと太平洋の真っ只中のさんご礁の島に通い続けていった。ほとんど問題意識は同じと思うが、やり方が少し違っていた。辞めた後も行き来はしょっちゅうしたし、伊藤さんは実にまめな人、筆まめでもありました。たくさん手紙を書いて、伊藤さんが死んだ報を聞いて物置からハガキを取り出してみたら、70何通ありました。東京からは無論のこと、広島、沖縄、福岡、伊藤さんが転々と居を移しながら、「1002人の被爆を聞く」を作っている間にそこから手紙を送ってきた。その中かなりまとまった書き物があって、1990年4月1日に書いた自叙伝の試みみたいなもの。彼は早稲田大学の第一文学部。そこで同窓会に出て、近況報告をする設定で、「架空発言、報告、私の卒業30年」というものを書いていて、読んでみました。

伊藤さんが長崎放送に入って、「被爆を語る」の企画を出して、それを始めて、しかし、佐世保転勤によって途中で担当を降ろされる。その辺りを自分の筆で補うと、「ラジオ番組『被爆を語る』第1回放送が、1968年11月5日、私の32歳の誕生日でした。思えば、21年前のことです。自分で発議し、社内的様々な障害を乗り越え、初代の担当者にもらって発足した番組でしたが、担当5ヶ月で佐世保へ転勤となり、交代を命じられました。マラソンを走るつもりでいたら、500メートル走ったところで、

バトンタッチと命じられたようなものです。佐世保へ転勤して翌年会社を辞めたのです。」

そして、伊藤さんは、'70年代、音質にこだわって重いテープレコーダーを買って、それを持って全国を回った。

「1970年代は私の放浪時代です。この間、時間給いくら、普通350円、もっと条件の良い深夜労働500円、肉体労働に従事しながら青森県の津軽地方から沖縄県の宮古島まで全国の原水爆の被爆者を訪ねて歩きました。この間、東京ー広島、東京ー福岡、長崎と転居しました。結局、丸8年、足掛け9年間かかって約2000人の被爆者と会い、1002人の方に、私は被爆者体験と呼んでいます話を頂いて録音しました。」と書いています。

この70年代、私はほとんどビキニ周辺、マーシャル諸島・ロンゲラップなどの島を訪ねていた。私は放浪時代で、たまに帰ってくると伊藤さんに会ってお互いの報告をする。伊藤さんの1002人の中には私がロンゲラップでビキニの核実験による被爆を語ったマーシャル人の声が17人はいっています。正確にいうと伊藤さんが録った数は1002人から17人引かなければならない。私も伊藤さんの仕事の一部を構成しているわけですが、70年代から伊藤さんの放浪に私も同じような時代を重ねていた。ほとんど伊藤さんは70年代に仕事を終えていました。後はどのように復旧させていくか、発表していくかということだけでした。つまり取材の時期が70年代ということになります。私も1978年、「棄民の群島・ミクロネシア被爆民の記録」という本を書きました。70年代の仕事に決着をつけて80年代に入っていくわけですが、伊藤さんも同じような70年代に骨格を録り終えていました。1980年代は収録したテープをどうやって人々に聞いてもらうか、模索の時代です。その前に長期保存のための保管場所の確保とか、テープの巻きなおしとか名簿の書き直しとか色々手間をかけました。そして80年代、2つのことをやりました。1つは、1002人のうち、もっとも代表的な51人の録音をごく粗くインタビューのまま、話の順や時間的前後を正す編集をする。生の声であるから保存が必要だけど、公開しないほうが良いだろうという部分をカットしてオープンリール52巻のマザーテープを作り、これから更に13組の複製を作り、広島、長崎の原爆資料施設、東京都立中央図書館、大阪府の平和祈念資料室のほか、札幌から沖縄まで全国13の施設へ寄贈しました。復旧の時代に入っていた。そして大きな録音構成を構想していく時代に入っていきます。伊藤さんは、最初から大きな録音構成を作ることを1980年代から会うたびに言っていました。8月6日、8月9日にNHKの第2放送は、1日全部被爆者の声を流して良いんじゃないかと、そうするくらいの価値はあるんじゃないかと、それに値するものを録音構成として作ろうと伊藤さんは実現性のほとんどないものと言っていた。最近、例えば、今日は1日モーツァルトとか、1日バッハというものをFM放送でやりますから、伊藤さんはこういうことを考えていたんじゃないか、あながち、荒唐無稽でもないな、これから場合によって、こういう番組が1日中電波空間を占めるというような時代が来てよいのではないかと思っていた。その為の素材として伊藤さんは1002人のものを録った。だから彼はいつも言っていた。「録音は最初からインタビュー番組用ではなく、録音構成用に録ってます。」つまり、ニュース記者のインタビューとして伊藤さんは録音していない、ラジオドキュメンタリーとして録音しました。

1番わかりやすく言うと相手がものを言っている間は、絶対に声を出して相槌を打たない、話がどんなに脱線しても話をさえぎらない、話終わるまで、我慢強く待つ、と

ということです。脱線の途中に思いがけぬこと、こちらが飛び上がって驚く新しいことをおっしゃることがしばしばある。無駄なところは、制作の段階で削ってしまえばよい。ただし、元テープは、断じて無編集のままで保存しておく。私たちには無駄話に聞こえる被爆者のおしゃべりから、後代がどのような新しい意味を発見するか、こういう問題意識、取材方法を徹底した。伊藤さんの録音の中には、自分の相槌から相手の言葉をさえぎるような質問は決して入ってこない。伊藤さんは、そういうふうにして完璧な素材、後代の人が録音構成、それも1日24時間にも充分値するような録音構成を作る素材として取材した、そのようなインタビューをした収録テープがオープンリールの7インチテープ、これで950巻、放送局の規格に直すと、3000巻くらいになる、とてつもない量になる。一人の録音時間が、1時間以上かかっているから、それを1002人分。こういうふうには、自分の夢というか自分が構想していること、後代に向けて黙々と録音して残していることの意義をこういう風に言っています。「1812年のことです。ナポレオンがロシアに侵攻しました。それから約50年経ってレフ・トルストイという人が『戦争と平和』を書きました。1860年、アメリカの南北戦争が始まりました。それから約70年、1929年、マーガレット・ミッチェルが『風と共に去りぬ』を書きました。1つの国民、民族にとっても、歴史的な体験が大きなスケールの文学作品に結実するためには、50年～70年くらいの発酵、熟成、そういう年月が必要らしい。」こういう風に伊藤さんは、私たち日本人が、「戦争と平和」や「風と共に去りぬ」に匹敵する世界に通用する大きな文学作品をこの歴史的な体験をめぐって生めるかどうか、それはいったい誰が書くのか、ということを手問しながら、それは後代の子どもでもある、今、子どももいる人たち、今は、ドラクエなんかに夢中になっている子ども、縄遊び、石蹴りに夢中になっている子ども、そういう人たちの中から、誰かが出てきて書いてもらいたい。以上がオープンリール版「被爆を語る」を寄贈させていただいた私の了見、遠望ですが、もしこの未来の大作の中で録音の中の登場人物の一人、あるいは語り手自身が作中の人物として生命を吹き込まれて生き生きと立ち上がってくれれば我がこととなりて私はにやりとするでしょう、お墓の下で、かもしれません。という風にこの核報告は結ばれています。1990年に伊藤さんが一応の仕事を終えた段階で、私に宛てた報告、もくろみみたいなものですが、一つはそういう大きなことを考え、また生きている伊藤さんが時代には受け入れられないだろうということを用意していました。伊藤さんの好きな言葉、高村光太郎の冬の言葉、「一生棒に振って人生に関与せよ」。この言葉は何10回聞いたと思います。一生棒に振って人生に関与する、これは今やっている、そういうこと。萩原朔太郎の詩の「一説も貫け、やり通せ、たったひとつの生を得よ」という自分を鞭打つ言葉として、光太郎や朔太郎はよく聞きました。「明治の反骨、昭和の気骨」という言葉も伊藤さんが好きな言葉で、明治人の反骨に学び、昭和人の気骨、昭和人とは自分ですね、自分の気骨を示す。つまり、今の世には受け入れられないだろう。それは、分かっているけど、やるんだ、そういう詩ですね。しかし、同時に伊藤さんは斎藤緑雨の言葉もよく引いて危機を後代に待つというは甚だしき誤りなり。誤りとはいわずとも、心得は引くことなり。ということで始まる緑雨の言葉もちゃんと知っていた。今の世の中で評価され、認められることに対して心惹かれるものを持っていたということは言うまでもありません。そして、彼にとって晩年となった数年間、いくつかの賞を贈られ、また、思いがけなかったような発表の仕方、彼が録った時にはオープンリールの録音テープ、それがカセットになり、CDになり、今は、DVD

になって、文字化し、映像化する形になって、新しい聞き手を得ることになる英語と言う表現手段で、外国の人にも聞かれる。自分が思っていなかったような聞かれ方を生きている間にして、また、いくつかの賞を受けることによって彼の社会的な認知がなされた。そういう意味では早すぎた死ではあったが、決してお墓の下でその時を待つということではない。評価をなされたのは、友人として大変良かった。そのように、伊藤明彦は、1002人の被爆者の「記憶のオベリスク」と呼べるような巨大な、大きなものを残してこの世から去ったわけですが、記録は、これから、「戦争と平和」になるか、「風と共に去りぬ」になるかは分かりません。私が伊藤さんに言ったのは、無数の詩人の心を揺さぶるであろう、多くの詩がこれから生まれるだろう。相槌を打たない、空白、間、テレビ、映像の間というのは、断絶ですが、伊藤さんの録音を聞いてみるとよく分かるが、断絶ではなくて、震源なんです。黙っているとき、震源みたいな深々とした沈黙がある。被爆者が語る時、饒舌な語りするとき、そして、伊藤さんが語りをやめた時に広がる中断でも、断絶でもない、深い深遠、沈黙、ここから、後代の詩人は、すばらしい凄いインスピレーションを得るんじゃないか、そういう読者、聞き手をあの作品は、これから得ていくと思います。しかし、現実の世界はまだまだ、このドキュメントの時は、3万発の核であった、今も2万発余の核兵器が世界に散在し、また、新たな核開発国を増やすような様相を示しながら、国際政治を作っている。私たちは、核軍縮はどこへ向かっていくのか、どこへ向かわなければならぬのかを問わなければならない。また、その道を模索しなければならないと思います。

今年はそういう意味で、大きな転機になる可能性があります。1つは、4月5日、オバマ大統領が、プラハで「核なき世界を目指す演説」をしたという大きな問題提起によって、もう1つは今月の終わりに総選挙が行われ、それまで、半世紀以上続いてきた自民党中心の政治体制が壊れるかもしれない。それは、変わる政治のあり方がでてくるかもしれないという日本の政治の変化の可能性、予兆、ということを通じて、世界の動きと日本の政治の動き、両方が核軍縮をどこへ向けるのかに関してこれまでと違う可能性を示しているように思われます。その時にジャーナリズムが何を伝え、どのように問題提起していくべきか、その時に、広島の声、長崎の声は、どのように扱われるべきなのかということが、大きな課題になる。オバマ大統領の核なき世界を目指してという提案に関して必ずしも評価は定まっていません。私はあまり高くは評価しません。道義的責任という言葉を使っていますが、投下に関して道義的責任といっているわけではありませんし、核兵器を無くすために行動する道義的責任という言葉は、しかし核兵器を無くすために行動するのはアメリカ1国ではできないということといい、自分自身は生きている間はそれを見ないだろうと言っている。私の第一印象ですが、かなり留保、留保、留保して言っているわけで、断固とした決意、明せきな言葉ではない。非常に注意深い、利口な言葉遣いであるが、明せきな言葉遣いではない。アメリカの大統領でこういう語り方で核を語った人がいるだろうか調べてみました。アメリカの大統領は戦後、二次大戦後12人いますが、軍縮を含めてはつきりしたこういう言い方をしたのは、アイゼンハワーが、「アトミック・フォア・ピース」という言葉で原子力の平和利用を語ったことがあって、ピースとアトミックがそこでは一つのフレーズの中で語られました。決して彼は核軍縮を言ったわけではありません、そういう論脈の中でみると、ジョン・F・ケネディとバラク・オバマ、二人がそれに該当するな、という気がします。ケネディは平和のための戦略。1963

年のアメリカン大学の卒業式の演説で語った言葉。それとオバマということになる。それ以外のアメリカの大統領はだいたい核戦略という文脈の中で、核をいかに使うか、どのように管理し、どのように外交の道具として使うかというような語り方であった。核戦略として核兵器が変転をとったかに関しても、なかなか興味深い論点です。広島と長崎に原爆が投下されてまだ半年もたない時にアメリカでは重要な報告が行われています。「アチソン・リリエントール報告」。後の国務長官になるディーン・アチソン。ニューディール政策のテネシー川の総合開発（TVA）の責任者をした学者出身の行政官で初代の原子力の諮問会議の責任者になるデービット・リリエントール。アチソンとリリエントールがアメリカの核兵器を二次大戦が終わった後、どのように管理し、どのようにすればいいか、初めて本格的な報告を書きます。1946年の3月に発表されています。たいへん興味深く、今日読んでも全く斬新なところがあります。彼らはこういうふうになっています。

「原子力を平和目的に発展させることと、原子力を爆弾のために発展させることは、その過程の大部分において交換可能であり、かつ相互に依存している。このことから次の結論が生まれる。すなわち、もし各国がその国境内において発展された原子力を爆弾と用いないと約束しても、それを破壊目的に転換しないという唯一の保障はその国自身の言葉の上の約束と信じ、誠実のみである。」

このように原子力の持つ二重性、後に原発用に発展していく分野と、核爆弾として発展していく分野とは実は同じものだ。だからそれをきちんと管理しないとだめだということ、それをまずしてきた上で、原子力の純然たる軍事的発展を飛報法化することが必要である。原子力発展に関する本質的な危険な部分をすべての国に対し責任を負う国際機関に委託することという原子力の軍事的使用禁止と、それを国際機関に付託するということを1946年の段階ですでに提案している。もしこの時期にこの「アチソン・リリエントール報告」が国際的合意になっていれば、その後の核の時代は無かったということになる。しかしこれはアメリカ政府の政策にはなりません。アメリカ政府は同じ時期、1946年3月、すでにビキニ環礁で原子爆弾の実験の準備を始めていました。横須賀に繋がれていた戦艦「ながと」が標的として太平洋のビキニ環礁に引っ張っていかれた。しかし一方では原子力の国際管理、原子力兵器の全面禁止の提案もしていた。そこにどっちつかずというところがあって、ソ連との間にすでに始まっていた冷戦の中でアメリカ政府はそれをきちんと主張しない。国連は第一回総会で原子力特別委員会をつくる。第一回総会の決議は原子力を禁止することの討議を特別委員会で行う。原子力特別委員会設置の決議でした。そこで生まれたばかりの核爆弾を一切廃棄する、禁止する、以後生産させないための国際的な方策をつくるのが討議されるが、アメリカ政府の代表バーナード・バルークは、まず国際機関、査察制度をつくり、そこに強力な強制権を与え、そしてそれは国連安保理事会の拒否権も通用しないような強い査察制度をつくる。それができたならアメリカは今持っている核兵器、核の原料、技術をそこに引渡して、以後そこが核の世界的国際管理をなすであろう。まず核の強制的、強力的な管理機構をつくることを提案し、その後、核兵器の廃棄という段階にはいる、それが「バルーク案」です。これに対し、ソ連のグレニコ・アンドレ国連代表の提案は、今核兵器を持っている、技術を持っているのはアメリカだけだ、まずアメリカがそれをみんなのみえる前で廃棄しろ、徹底的になにもないようにすべきである。その何も無くなった段階でそれをまねる国、つくろうとする国ができないようにするための管理機構をしっかりとつくるべきだ。ただ、その管理

機構に国連の安保理事会の拒否権を覆すような強力な権限を与えるべきではない、と主張します。つまりソ連はまず「廃棄」、そのあと「管理」。アメリカはまず「管理」、そのあと「廃棄」。このボタンの掛け違いが最初の原子力の国際管理を実現させない対立という形で終わってしまう要因になった。1949年になるとソ連は核実験に成功します。アメリカのおおかたの予測をはるかに上回るソ連の核開発の実現でした。以後米ソの核軍縮競争が広がっていく中で、核の軍縮、核なき世界を語ることはなかなか難しかったが、1963年のケネディの平和への戦略がその中では今回のバラク演説と響きあうようなニュアンスを持っています。ケネディはこの演説の5ヶ月後に暗殺されるのでそれをどういうふうに展開させるつもりだったのか、ただ構想しただけだったのか、もう少し機密な計画をもっていたのか立証するのは誰にもできなくなりました。ただ63年に部分的核実験禁止条約という、大気圏内で核実験を禁止する条約がアメリカ、ソ連、イギリスの間で結ばれたことはケネディの核軍縮に対する取り組みをある程度反映している。そこで止まるのではなくてCTBT、パーシャル(部分的な)禁止条約ではなく、コンプリフェンシブの包括的核実験にケネディがいく、その一歩手前のPTBT(部分的核実験禁止条約)をまず結んだのではないかと考えることはできる。いずれにしても彼は平和への戦略という演説の中で核なき世界をちらりと垣間見せましたが、彼の突然の死によってそれは成就することはなかった。彼の国防長官に任命されたロバート・マクナマラはジョンソン大統領のもとで核兵器の抑止力、破壊的な力を、相手の攻撃を抑止する力として作りだす相互確証破壊(Mutual Assured Destruction, MAD)。アメリカの核兵器はソ連の第一撃を受け入れてなお生き残る力を持っている、備えておく。ソ連の第一撃を受けても残存する核戦力をもつ、その残存した核戦力でソ連の工業力の三分の一、都市人口の四分の一を破壊する。それを相手に示しておけばクレムリンに認知させておけばクレムリンが合理的な思考と理性的な政策判断をするかぎりアメリカを攻撃することはありえない。したがってアメリカは安全である。双方確証破壊ということ、積み上げた核の上に平和をつくる、あるいは核に引き金をかけることによって相手の引き金を引く力を抑える。マクナマラがつくりだしたのはこういうこと、ケネディはこれに対しどうだったかわからないが彼の有名な演説の中に、「ダモクレスの剣」というギリシャの故事を引き合いにだした演説がある。我々人類は細い毛髪でつるされたダモクレスの剣の下で寝ている旅人のようなものである。もしその髪が切れば下で寝ている旅人は死んでしまうわけですが、そういうふうには核時代の人類の運命を表現したことがある。マクナマラのような考えには彼は否定的な見解をもっていたと考えられるが、マクナマラはケネディ大統領が最初に行った人事で国防長官に任命された人、つまりマクナマラはダモクレスの剣につるされた状況を直視し、剣を安定させるには毛髪ではなく、ロープにすればいい。ロープにつるされた剣にすればより安全になるだろう。それがMAD(相互確証破壊)であるかもしれない。ソ連がいきなり先制攻撃をしかけてきたとしても核の三本柱の最大の報復力となる潜水艦に搭載した弾道力は海の下を何十隻か、常に移動していることによって第一撃では決して倒されない不死身の核戦力として残す。その不死身の核戦力がソ連に対し工業力と人口の大半を一瞬のうちに破壊してしまうような威力を与えるということ。それを意図してソ連指導者に伝えておく、それにより核戦争を防ぐ。以後、ずっとそれが続いてくる。レーガンのような信心深い人が、これはちょっと不道徳であると異議を差し挟んだことがある。レーガンのスターウォーズ演説、宇宙戦争です。宇宙からソ連の弾道ミサイルを叩き落とすというコ

ンセプトでした。決して大西洋に沈んだ弾道ミサイルで相手を抹殺するというような報復の仕方ではなく、宇宙で飛んでくるソ連のミサイルを破壊する。彼がこのスターウォーズ構想を着想するのはアメリカの核戦力が相互確証破壊に支配されているのを説明をうけた時に、それは非常に不道德だという印象を受けたと書いている。そういうことをちらっと考えた人はいますが、基本的に抑止戦略は今に受け継がれ、日本の指導者にも核の傘とか、拡大抑止というかたちでもっと強くしてほしいという対米要請のようなかたちで繰り返されています。そういうふうにはアメリカの核戦略は抑止という相手の攻撃をためらわさせるような力を相手に返し、持ち、それを不死身のものとして残存させ相手に明確なかたちで伝えておく。それが冷戦時代の文法であり、核時代の論理であった。それを疑う人はいなかった。かえって、キッシンジャーのような人たちによって限定核戦争に応用されるようなものにだんだんくみ上げられていく。冷戦が終わった後、オバマの核なき世界を目指すのも、その一つの流れ。

冷戦が終わった後、相互核抑止に基づく核の抑止、核によって核を制するという考えが成り立たなくなったことをアメリカの核戦略家たちは、気づかされます。オバマの前にもっと衝撃的なことを主張する人が現れました。ヘンリー・キッシンジャー、ジョージ・シュルツ、サム・ナン、ペリー国防長官、いずれも、タカ派であり、国防政策、核政策に対し大きな権限、影響力を持った人。キッシンジャーは、学者として、理論構築をしました。こういう人たちが核廃絶のメッセージ、核はもはや役に立たないという提言、核廃絶のメッセージを発表しました。悪い冗談と世間は驚きました。本人たちは真面目なわけですが、名だたる核抑止論者たちが核の廃絶を訴える共同提言に名を連ねるといふようなことを行った。オバマ提案もその流れの中にあるわけですが、何故そのようなことが起こったのか。それは、冷戦米ソ、ほぼ同じサイズの国が、また、同じ程度の能力を持って対峙していた。そのような核の時代には、抑止というものが成り立った。ロシア人とアメリカ人も、双方が合理的な思考を行い、理性的な政策選択を行う事にかけては、相手を信頼することができた。清水の舞台から飛び降りるといふ東條英機がやったようなことは、クレムリンはやらない、アメリカはやらないという理解があってこそ、初めて抑止ということは成り立つ。そういう理性と知性の信頼、相互信頼があった。冷戦が終わったということは、それがなくなったということでもある。イランの国家指導者と朝鮮の国家指導者と、ワシントンとの間に、そのような合理的思考、理性的政策選択を通い合わせるような理解は成り立たない。テロリストと呼ばれる人たちは、最初から自らの身体にダイナマイトを巻きつけ、自爆、自分の命を亡くしてかかる。抑止という概念が言葉としてありえない。そして、今の国際情勢は、抑止不能な人たちが核兵器を持つという方向に向かって動いている。いつ、そうなっても不思議でない情勢がある。キッシンジャーは、決して、発狂したのではない、錯乱したのではない、もう、抑止が制御不能の国際情勢に入った、だったら、これは、抑止の再構築より核をなくすという方向に行くべきではないのか、おそらく、そういうこと、我々の世界はそちらの方向にさまよいでている。そうなる前にしっかりした、歯止めをかけなければならぬ。それには、オバマ提案はまだ、大きな方向性、将来展望を示しただけですから、そうではなくもっと具体的ではっきりした目標、それを色々な形で指し示めされなければならぬ。核保有国が相互に検討するような核軍縮のありかた、また、日本のような国から発せられる、更に、国連で討議されるような、まず、何よりも必要なのは、これまで、核兵器が世界に拡散してきた、その国際情勢における相互不信、何故、核があふれる世界になってきたのか、

ということに関する、核大国の責任と反省が必要と思う。オバマ提言には、まだ、その分がない。核の拡散は、よく水平拡散、垂直拡散と言う言葉で言われます。縦の拡散、横の拡散とも言われますが、つまり原爆が水爆へ、水爆が中性子爆弾へ、また、空中からの自由落下の爆弾が、大陸間弾道ミサイル（ICBM）へ、潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）へ、人工ミサイルの弾道の戦術爆弾へ。技術的進展が垂直拡散とか、縦の拡散と言われます。一方、水平拡散、アメリカ一国しか持っていなかったのが、ソ連が加わり、イギリスが加わり、フランスが加わり、中国が加わり、どこかでイスラエルが加わったらしく、やがて、南アフリカが加わったようで、なんだか抜けたようで、今は、イランと北朝鮮とアルカイダが、ひょっとして・・・というような、水平拡散。垂直拡散、水平拡散の縦と横が核の恐怖、というような大きな国際情勢の織物を織り上げてきた。少しそれを別の角度から見ると、後ろへの拡散、背後への拡散と言うのではないか。相互不信というか計算もしていなかったところに転がっていく。つまり、アメリカがまず、核兵器を持った。そして冷戦が始まり、ソ連が追いつくべく、ソ連の目的はアメリカと対等の立場を得る、冷戦の東側の指導者になる、その為には、核が不可欠、そう思い、ソ連は核を開発した。アメリカに遅れること4年後、成功します。それは、直ちに、イギリスの核保有に転じていきます。ヨーロッパの核軍化、1952年にイギリスは核を持ちます。ソ連はアメリカの方ばかり見ていたが、ヨーロッパの北にあるロシアの核保有は、イギリスに危機感をもたらした。1952年、イギリスはロシアに対して見ていた。ヨーロッパにおける反響という形で見ていた。イギリスが核を保有したことによってフランスが核を持たなければと感じます。フランス、1960年という風に後ろに逃げる、イギリスはソ連の方を見ているんだけどフランスがする、同様にソ連の核保有は中国の核保有につながっていく。ソ連が核を保有した1949年は、中ソ同盟ががっちりしていたときで、中国はただちに核保有を考えていませんでしたから、やがて、中ソ論争、中ソ対立となる中で、中国は、ズボンをはかなくても、核は持つ国家目標を選択します。そして、1964年に核を持った。それは、中ソ対立という社会国家の対立の中で整理できますが、中国の核保有はインドに別のシグナルを与える。1974年、インドが核開発を行う。中国はロシアの方を見ていたけど、インドに対するシグナルとして、背後への拡散に転化したことに気づかなかった。インドは中国に対し激しく反応しましたが、自分の核保有がパキスタンにどういったインパクトを与えるかを計算していなかった。パキスタンが1996年、ここもズボンをはかなくてもという核運営のもとに、ということ。インドに対する対抗心から核を持つ、パキスタンの核は、イスラムでどうなっているか、キッシンジャーが自信を無くしてしまうほど、抑止力の概念を低下させる形でこれは、背後への拡散という形で整理したほうが良いのではないか。思いもかけなかったような拡散の仕方をする。垂直でも水平でもない核はそのようになりかたぐれに、人間の短慮、知恵の無さがそのように核の氾濫する世界を示してきた。マクナマラもキッシンジャーも決して思慮深い学者というより彼らの理論そのものが間違っていた。その辺りをきちんと反省しなければならない。マクナマラ氏は先月亡くなりましたが、彼はかなり深刻に反省していました。でも、キッシンジャーは何一つ自己批判していない。まず、核抑止戦略というものを作り、核を正当化し、核の上に平和が築かれていると主張してきた。核戦略の立案者たちがやはり間違っていたことを自己批判することが大切だと、まして、そのような国に対し、核の傘を依頼する、核の傘に依存するとか、その核の傘の拡大抑止を更に発展させるとか、拡大抑止の概念を相手

が核攻撃に限定せずどのように攻撃があった時も、核で報復するというようなこれは拡大抑止の発展といわれるが。アメリカの核を更に日本の安全保障に利用しようとしたり、また、核の持込を認めようとしたり、というようなことを日本政府がやめることが必要ではないか。少なくとも、オバマ提案を一生懸命邪魔しているのが日本の拡大抑止とか、核の傘を更に強化するその保障をアメリカにしてほしいということは、オバマ演説を否定するような流れになってしまうことは間違いない。そのような大きな歴史の曲がり角になるかもしれない。オバマ提案はまだ曲がり角の所在を明らかにしたわけではありませんが、アメリカの大統領、ケネディに続いて二人目となるような大きな構想を投げかけたのは間違いありません。同じ年、少し遅れて日本では、55年体制が来年ですが、また、安保条約が改定されて、50年目が来年ですが。その時に政治の体制が大きく変わろうとしている。では、核についてどう考えるか、私たちは一生懸命考えなければならない。考えるのに絶好の位置にあるだろうという気がしています。

以上を持って問題提起に変えたいと思います。



前田哲男さん